

皆さん、こんにちば。今日は、皆さんの附設中学校の卒業証書授与式です。皆さんは、今から丸三年前、平成二十四年四月に久留米大学附設中学校に入学し、この三年間、いろいろあったと思いますが、本日を迎えられました。保護者の皆様も感無量のことと推察申し上げます。おめでとうございます。

ただ、考えてみますと、附設は中高一貫校ですので、中学卒業ということが殊更の意味を持つわけでもないし、実際、多くの中高一貫校や中等教育学校では卒業式は高校卒業のときだけ行っております。わたくしとしては、附設中学校の卒業式も修了式に合流させてしまうのがよいのではないかと考えており、実際、そのような提案を職員会議にしたこともあります。

しかし、長い伝統というものがあって、来年度からはともかく、今年の場合も、中学卒業式をしっかりと挙行しなければならぬ理由として、皆さんが中学最後の、そして、附設中高併せて唯一の男子学年だということが挙げられます。一方、今朝、今年度の修了式があり、中三の皆さんとすでに卒業した高三の諸君以外の、中一から高二の人たち相手に式辞を陳べました。修了式の式辞では、図書館を正しく利用してほしい、ということの絡みで、三冊の本を紹介しました。つまり、水野学さんの『センスは知識からはじまる』、山本貴光さんの『文体の科学』、そして、田島麻衣子さんの『世界で働く人になる』です。

中三の諸君は今後も基本的に附設高校で学ぶわけですから、学校との縁が切れるわけではありません。そういう意味では、修了式の式辞を繰り返してもよさそうですが、中二の皆さんが列席しています。しかも、何日前に修了式の式辞は、中一、中二の学年通信に載って配布されてしまっています。実際、修了式の最中、生徒たちがおとなしくしているかどうか、大分気を揉みましたが、皆さんの後輩諸君は大したものです。しっかりと聞いてくれました。

ともかく、そんなこともあって、ここでは、修了式の式辞でちょっと触れた三森ゆりかさんの本を四冊紹介したいと思います。

三森さんの本に最初に気づいたのは、何年前になりましたが、

『外国語を身につけるための日本語レッスン』（白水社 二〇〇三）

でした。わたくしの感覚では、極めて当たり前のことが丁寧に書かれている、一言でまとめれば、日本人が一般に英語ができないのは実は日本語の使い方が上手ではないからだ、というわけで、英語と同じように日本語を使う訓練法が書いてあります。実は、三森さんは帰国子女で、中学高校に相当する期間をドイツで過ごし、その時に受けたドイツ語教育、つまり、ドイツ流に言えば、国語教育ですが、それを日本語の場合にしたらどうなるか、

ということを、いわば、マニュアルの形に述べたのがこの本です。生徒の皆さん向けというよりは、保護者や先生向けと考えるべきかも知れません。

この本より、もっと凄いと思ったのは、

『外国語で発想するための日本語レッスン』（白水社、二〇〇六）

で、これは、絵画や景色などを含むいろいろな対象の分析的な記述、つまり、言語化の仕方が解説されています。さすがドイツ流と言いたいのは、この手法が体系化され、教育に取り入れられていることです。日本人でも、あの人はできる、とか、説明がわかりやすい、という印象を与える人の場合、自分で、あるいは、それまでの出会いが助けになって、この本で紹介されているような技術を身につけていることが多いと思います。ただ、自前の開発は偏りがちだし、不足も多いことを思うと、やはり、さすがドイツ流ということかな、と思いますが、実は、以上のような、言語教育・母国語教育は、「言語技術教育」と言いますが、西欧圏の国々ではいずこも行われているのだそうです。

しかし、三森さんの主張や実践には批判もあるようで、

『親子でできるコミュニケーション・スキルのトレーニング』

論理的に考える力を引き出す』（声社 二〇〇二・二〇一二）

の第四章「二一世紀の日本の子供へ」という章では、三森さんのやり方は

「…子供の感受性を育てない。論理が破綻しているから子供の感受性は瑞々しい。

無理矢理トレーニングをすると、非情緒的で無味乾燥な人間になる。論理的に

思考する子供は理屈っぽくて、他人に嫌われたり、いじめに遭ったりするのは

ないか」

と批判を受けてきたとあります。三森さんは、家庭でも学校でも言語技術教育を受けてきた西欧の人には感受性はないのか、かれらは情緒的ではないのか、と答えるようにしているとあります。この返答は、いかにも西欧的ですが、やはり正しいので、わたくしなりに補足しますと、子供は大人のペットではない、ネコツ可愛がりをするのではなく、いずれは大人になるのですから、しっかりとした大人にするためには手間暇を惜しむべきではないということですし、さらに、三森さんが挙げておられる逸話からは、どうやら子供たちははるかにしたたかで、並みの西洋人や並みの日本人を超えたレベルで自然に振る舞えているようにも思われます。

皆さんからはまだ遠い将来のことのようですが、最後に、

『大学生・社会人のための言語技術トレーニング』（大修館書店 二〇一二）

を挙げておきましょう。内容的には、上の三冊とかぶるところが多いのは当然ですが、非常に周到な教科書になっています。わたくしにとつて印象深かったのは、スキル・トレーニングの章の一節「説明」に現れる「空間配列」の話で、「空間配列」とは、文字通り、「空

間の配列」なのですが、そこに、フランス共和国の国旗の説明をせよという例題が載っています。要点は、その説明を聞いて国旗が再現できるか、ということですが、コミュニケーションの際に、説明なしでも共通に了解できているはずのこの確認が先行していないと、実は、コミュニケーションが成り立たないということがわかります。

以上の四冊は、まだ登録が済んでいないものもありますが、いずれも図書館にあります。

大分長くなりましたので、わたくしの式辞は、そろそろ終わりです。修了式の際にも述べたことですが、残念な苦言。図書館の本は正しく扱いましょう。図書館の本は、今だけでなく、これからの附設生のためのもでもあります。無断での持ち出しや借りっぱなしはダメです。借りるときはきちんと手続きをして、期限内に返却してください。

このことを踏まえて、図書館を大いに利用し、有意義な高校生活をおくってください。

本日は、おめでとうございました。

以上で、わたくしの式辞は終わります。

平成二十七年三月二〇日

久留米大学附設中学校 校長

吉川 敦